

横顔
就任インタビュー



未来医療につながる 最新の診断や手術を

ルミナルタイプ早期乳がんの再発リスクを予測する多遺伝子診断法や、最新の乳房再建手術を実践してきた直居靖人氏。新しく就任した京都府立医科大学にて研究や治療をどのように継続していくのだろうか。

京都府立医科大学 内分泌・乳腺外科学

な お い や す と

直居 靖人 教授

1999年大阪大学医学部卒業。箕面市立病院、吹田市市民病院、大阪大学医学部乳腺内分泌外科学教室准教授などを経て、2022年から現職。

京都府立医科大学 内分泌・乳腺外科学
京都市上京区河原町通広小路上る梶井町465 ☎075-251-5111(代表)
<https://www.kpumbreast.com/>

多遺伝子診断法で 再発リスクを予測

日本人の乳がんで60%を占めるルミナルタイプ早期乳がんにおける再発予測法「Curbest 95 GC Breast」を開発した直居靖人教授。大学時代から過ごしてきた大阪を離れ、故郷の京都府立医

科大学の教授に就任し、この研究をさらに続けている。「約2万もの全遺伝子から乳がんの再発に関係する95個の遺伝子を選択し、手術後の再発リスクをハイとローの2群に分けて診断する多遺伝子診断法です。100点満点中50点を中心に、50点上の場合抗がん剤治療が必要といった一

つの目安になり、現在国内121施設で採用されています」。再発リスクの予想において確実な実績を残しており、現在保険収載を目指し準備を進めているという。この診断法にはもう一つのメリットがある。検査後に約2万の遺伝子全データを付録のCDに残していく取り組みだ。「このデータは

各施設からウェブを介して集約され、データベースとして構築されます。これを今後解析していくことで、低コストかつより精度の高い多遺伝子診断法の開発といった、未来医療につながる仕組みが出来るのです」。当初、欧米人のデータをもとに開発されたこともあり、このデータベースが構築されればより日本人にふさわしい診断の方法が見つかるかもしれない。また年齢による違いや、現在の診断では防げなかったローリスクでのわずかながらの再発の原因も見えてくるのではないかと期待している。

「ローテーションフラップ」だ。これは乳房の下部にあるがん組織の摘出手術で、従来は例えば摘出した部分の補てんに背中の組織を用いる際は、患者の負担も大きかった。「ローテーションフラップは乳房のがん組織と、その対角線上にある組織を三角形に切り取って補てんする根治性と整容性に優れた手術法です。京都府立医科大学でも就任から半年で6例を実施しました」

負担が少ない 最新乳房再建手術

全国的に見て、乳腺外科領域を志望する医師は年々女性が増えている。最新の治療技術を用いることは医師の体力的な課題のクリアにつながる。「以前は午前と午後と長時間かかっていた乳房再建手術が、例えばローテーションフラップを用いることで午前中だけで済みます。止血だけでも大変だった手術が最新のデバイスで時間短縮でき、医師の負担はかなり減りました」。若手には最新の技術を世界中から取り入れ、医工連携による開発にも取り組んでほしい願う。「50年後100年後の未来医療のために今、何をすべきか。『乳がん死ゼロ』を目標に私も先頭に立って挑戦していきたいと思います」

前職の大阪大学では島津研三教授のもと、先進的な乳がん治療が実践されている。その一つが三宅智博助教がドイツで学んできた最新の乳房再建手術法「ローテーションフラップ」だ。これは乳房の下部にあるがん組織の摘出手術で、従来は例えば摘出した部分の補てんに背中の組織を用いる際は、患者の負担も大きかった。「ローテーションフラップは乳房のがん組織と、その対角線上にある組織を三角形に切り取って補てんする根治性と整容性に優れた手術法です。京都府立医科大学でも就任から半年で6例を実施しました」

女性医師が 活躍できる環境

広範囲にがんが転移した進行がんの手術では、超音波振動とジュール熱で止血しながら手術が行える最新のエネルギーデバイスを採用。出血を最小限に抑えつつ、手術時間の短縮が実現した。「京都府立医科大学附属病院の理念は、『世界トップレベルの医療を地域へ』です。私が前職で得た最新の知識や技術を、故郷である京都やその周辺地域の皆さんに還元することこそが、私の使命であると感じています」